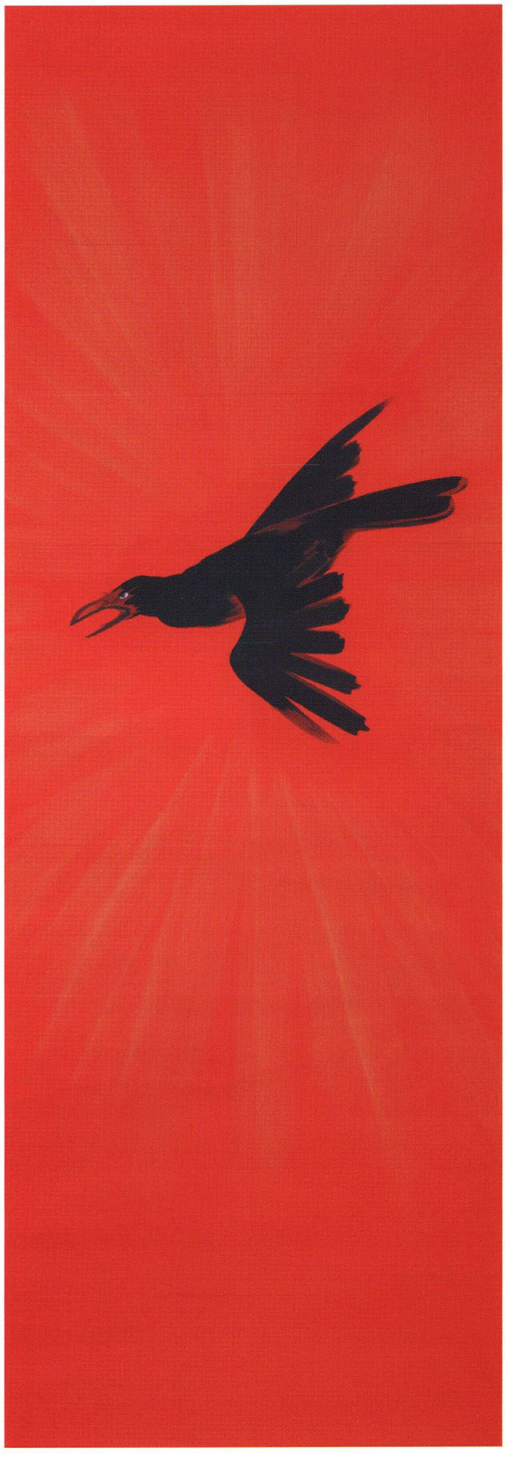
19　神鳩図茶碗

永楽善五郎（十六代）　一点

平成元年（一九八九）
陶磁
口径一二・四　高台径四・三
高八・〇

朱と金彩で筆勢を感じさせる幾筋かの刷毛目の線をひき、その上から胴に大ぶりの白鳩を描いた茶碗。雅やかな色絵の作風は、京焼の伝統を代々受け継いできた十六代永楽善五郎（即全、一九一七～九八）の特徴である。色数を抑えながらも鳩の輪郭線や刷毛目のなかに金彩を効果的に用いて、清浄さと華やかさを両立させている。平成元年（一九八九）、表千家家元千宗左より秩父宮勢津子妃へ献上された。家元の箱書きで「神鳩茶碗」とある。



20　旭に烏　長井一禾か

一幅

明治後期～大正期（二十世紀）
絹本着色
本紙一四五・一×四八・五

旭日を思わせる真っ赤に彩色された画面の中央に、漆黒の烏が一羽、翼を大きく広げている。太陽と烏の取り合わせをさかのぼれば、太陽の中に三本足の烏が住み、太陽は烏によって運ばれるという中国の神話があり、烏は古代中国において太陽の象徴であった。日本でもキトラ古墳の壁画や法隆寺の玉虫厨子などに日輪の中に烏を描く例が見出せる。また、烏は『日本書紀』の中で、東征する神武天皇の案内役として天上から遣わされたことから、熊野では神の使いとして信仰されている。本図の放射状に光を放つ烏には同じく『日本書紀』の中で、那賀須泥毘古（ながすねひこ）との戦いで神武天皇の弓にとまって光を放ち、敵の目をくらませて勝利に導いた金の鵄のイメージも重ねられているように考えられる。

本図の伝来は不詳で、作者を示すものも付されていないが、その画風から烏を好んで描いた画家長井一禾（一八六九～一九四〇）の筆によるものと思われる。一禾の烏は当時、竹内栖鳳の雀、大橋翠石の虎と並び称されていた。

・各展覧会図録中，作品名や作者，制作年などの表記は，図録発行当時のものです。

・三の丸尚蔵館の展覧会図録の著作権はすべて宮内庁に属し，本ファイルを改変，再配布するなどの行為は有償・無償を問わずできません。

・三の丸尚蔵館の展覧会図録（PDF ファイル）に掲載された文章や図版を利用する場合は，書籍と同様に出典を明記してください。また，図版を出版・放送・ウェブサイト・研究資料などに使用する場合は，宮内庁ホームページに記載している「三の丸尚蔵館収蔵作品等の写真使用について」のとおり手続きを行ってください。なお，図版を営利目的の販売品や広告，また個人的な目的等で使用することはできません。

寿ぎの品々を読み解く
三の丸尚蔵館展覧会図録No.75

編集　宮内庁三の丸尚蔵館
制作　株式会社　東京美術
翻訳　黒川廣子
発行　宮内庁
平成二十九年一月七日発行

© 2017, The Museum of the Imperial Collections, Sannomaru Shōzōkan